

白鳥庖丁

同年○萬治三年十一月十六日、御臺所天野五郎太夫、鈴木喜左衛門兩人被召出於御所五郎太夫鯛庖

丁、喜左衛門雁庖丁被仰付、上覽以後喜左衛門小袖二被下候、

〔宗五大草紙上〕色々の事

一 貴人の前へまな板持參之事、庖丁仁の左の方をかきて出る人はうは手也、公方様正月二日細川殿へ御成はじめに、進士白鳥をきり申候、其時のまな板を伊勢名字兩人參り候て持參申候、應仁の亂前迄は、親にて候者下總守貞牧、備後守貞熙其時七郎左衛門、兩人御供衆の外役につきて參り候、大口ひた、れ著候、進士同前、亂以後さやうの儀なし、

〔年中定例記〕殿中從正月十二月迄御對面御祝已下之事

一一 亂已前までは、今日○正月二日細川殿へ御成始あり、御供衆の外、御役に付て、伊勢備後守貞熙、又下總守おや貞牧打、御供衆の御跡にまいる、進士御前にて白鳥切り申、此まないたを貞熙と貞牧かきて參候、一 亂前まで此分也、進士うちらを著、

〔武家調味故實〕二 白鳥切事、一の羽ふしより次第につゐてくぼね、三に可切、さておろす事如雁也、

〔續視聽草 八集三〕庖丁上覽

今度珍敷庖丁被仰付候處、御慰にも被成、御機嫌被思召候、依之拜領物被仰付、於奥被仰渡候、

時服二

御臺所頭

小林定右衛門

一 右品は去月三日、川崎筋御鷹狩之節、白鳥御弓ニ而御射留被遊候、右白鳥御矢開可被遊との思召、御臺所頭定右衛門へ庖丁被仰付候、

公方様、大納言様、御一同御休息所御勝手之方、長圍爐裏の上御著坐、鵜庖丁古實に白鳥鵠と唱申候、於長圍爐裏之間被仰付、鵠載せ候御眞那板、御納戸衆兩人之者持出、長圍爐裏之下に置て、定右衛門熨斗目長袴著罷出、庖丁勤之、畢而御眞那板引之、